

プログラム・ノート

片桐卓也

「室内楽の庭」の多彩なコンサートのなかで、毎年もっとも華麗な花を咲かせるのがフィナーレである。今年も若い演奏家たちによる弦楽四重奏や、ベテラン勢による隠れた名作の演奏など、聴き逃せない作品ばかり。さらには世界的なホルン奏者と日本を代表するハーピストが参加するマーラーの交響曲第5番第4楽章の演奏など、室内楽という枠すら超えて、新しい音楽の「庭」を予感させるようなラインナップだ。まさに一期一会の音楽的な出会いを楽しんで頂きたい。

イベール：ヴァイオリン、チェロ、ハープのための三重奏曲

フランスの作曲家ジャック・イベール(1890～1962)はパリ生まれで、パリ音楽院で学んだ。彼はカンタータ『詩人と妖精』で名誉あるローマ大賞を受賞しローマに留学するが、その時期に、今もよく演奏される代表作の管弦楽曲『寄港地』(1922)などを作曲している。

イベールの室内楽はあまり日本では演奏されないが、木管五重奏曲、弦楽四重奏曲などがある。ハープを編成に加えたこの『ヴァイオリン、チェロ、ハープのための三重奏曲』は1944年の作品。3つの楽章から構成される比較的短い作品で、1946年にパリのサル・ガヴォーで初演されたが、その時にハープを演奏したのはイベールの娘ジャクリーヌだった。

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第15番 イ短調 作品132 より 第3楽章

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が「第九」交響曲などの大作を完成させた後に取り組んだ弦楽四重奏曲(第12番 作品127以降)を「後期弦楽四重奏曲」と呼ぶ。第15番 作品132は第12番、第13番と並んで、3曲まとめてガリツィン侯爵に献呈されたことから「ガリツィン四重奏曲集」とも呼ばれる。第15番は全部で5つの個性的な楽章から構成されるが、その第3楽章(ヘ長調)はリディア旋法という古くはグレゴリオ聖歌にも使われていた旋法を使い、「病癒えた者の神への聖なる感謝の歌」(原文はドイツ語)と題された、いわばベートーヴェン自身の祈りの音楽である。モルト・アダージョからアンダンテへと、静かに、しかし深く心に訴えて来る音楽のなかには、ベートーヴェンの横顔を垣間見ることが出来る。

フランク：ピアノ五重奏曲 ヘ短調 より 第1楽章

ベルギー出身で、その人生のほとんどをパリで過ごした作曲家セザール・フランク(1822～90)は、同じベルギー出身の名ヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイ(1858～1931)に献呈した自身唯一のヴァイオリン・ソナタが現在でもよく演奏されている。2022年は彼の生誕200周年にあたり、彼の本領とすべき大規模なオルガン曲や交響曲ニ短調が日本でも演奏されている。

初期にピアニスト、オルガニストとして活動していた時代を経て、1874年に、リヒャルト・ワーグナー(1813～83)の『トリスタンとイゾルデ』に接したフランクは、再びピアノを含む室内楽の作曲に意欲を持つようになった。そして1878～79年にかけて作曲されたのが、このピアノ五重奏曲だった。

全体は3つの楽章から構成され、この第1楽章は作品全体を支配する主題が展開される。冒頭のヴァイオリンによって奏でられる主題は「ドラマティコ」と指示され、第1楽章の長い序奏部だけでなく、作品全体を通して重要なテーマとなる。主部のアレグロでは、その冒頭主題を使った第1主題と、弦楽器にまず登場する第2主題が重層的な音楽を作っていく。初演は1880年に国民音楽協会のコンサートで行われ、その時はカミーユ・サン＝サーンス(1835～1921)がピアノを担当した。

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲第2番 ヘ長調 作品22 より 第3楽章、第4楽章

ロシア音楽を代表する作曲家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840～93)はウラル地方で鉱山技師として働く父親のもとに生まれたが、チャイコフスキーという苗字は、ウクライナ特有の苗字である「チャイカ(かもめを意味する)」から改称したもので、祖先はウクライナ中部に住んでいたという。ピョートルはサンクトペテルブルクの法律学校で学び、法務省に勤務するが、音楽への夢を諦めることが出来ず、ペテルブルク音楽院で1862年から本格的に音楽を学び始めた。ここでアントン・ルビンシテイン(1829～94)と出会ったことが大きな転機となった。

チャイコフスキーはモスクワ音楽院で教えていた時代に弦楽四重奏第1番 作品11(1871)を書き、この曲の第2楽章は「アンダンテ・カンタービレ」として単独で演奏されるほど有名となった。その後、1874年に完成したのが弦楽四重奏第2番であった。日本では演奏される機会は少ないけれど、当時の名ヴァイオリニスト、レオポルト・アウアー(1845～1930)からも賛辞を受けた傑作である。

ここではその第3楽章、第4楽章が演奏される。第3楽章はヘ短調で、少し悲痛な表情の音楽が紡がれていく。第4楽章は一転して、力強く明るいヘ長調のフィナーレ

となる。リズムカルな動きのなか、各楽器に次々とメロディーが登場し、クライマックスへと向かう。

バルトーク：弦楽四重奏曲第2番より 第2楽章、第3楽章

ベラ・バルトーク(1881～1945)の書いた音楽は、イタリア、ドイツ、フランスなどで発展したいわゆる西洋音楽とは一線を画し、ハンガリー、ルーマニアを中心に、それ以外の地域の民俗音楽なども自分の創作のインスピレーションとした点で、まさに多様なルーツに基づいた20世紀文化を象徴する存在である。特にバルトーク自身の音楽観の変遷をよく表現しているのが弦楽四重奏曲のジャンルで、彼の残した全6曲の弦楽四重奏曲を順番に聴いていくことは、20世紀前半の歴史を振り返るような印象を与えてくれる。

1909年に完成した第1番の後、弦楽四重奏曲第2番は1915～17年、つまり第一次世界大戦の時期に書き進められ、1918年に初演された。今回は演奏されない第1楽章は「静かで平和な人生」を想起させるが、第2楽章アレグロ・モルト・カプリッチオーソは荒々しい時代の波が人生に襲いかかるような印象を持ち、第3楽章レントは、すべてが断片となって消えていくような、一種の喪失感と虚無感がある。既存の音楽とは違う、まったく新しい一歩を踏み出したバルトークの姿をそこに見ることができると思う。

マーラー (パボラーク 編曲)：交響曲第5番 嬰ハ短調より 第4楽章「アダージェット」

19世紀末から20世紀初頭のウィーンを沸かせたアーティストのひとり、グスタフ・マーラー(1860～1911)は1897年にウィーン宮廷歌劇場の音楽監督となったが、このポジションは当時、指揮者としてはもっともステータスのあるものと見なされていた。1902年にはアルマ・シントラー(当時22歳)と結婚したが、その時期に書かれていたのが交響曲第5番であり、1902年の夏にいったんは完成に漕ぎつけた。初演は1904年にマーラー自身の指揮によりケルンで行われた。全体は5つの楽章から構成されており、第1と第2楽章、そして第4と第5楽章は、お互いの主題が深い関係を持つ形となっていて、第3楽章スケルツォをはさんで、いわばシンメトリーな構造を持っている。

第4楽章アダージェット(小さなアダージョ、という意味)はオリジナルでは弦楽器とハープのみで演奏される楽章だが、今回はパボラークの編曲により、ホルンとハー

プ、弦楽四重奏により演奏される。もともとホルンはこの第5番のなかではかなり目立つ存在であり、それが登場しない第4楽章をバボラークがどんな風に味付けしたのかが、とても興味深い。

バルトーク：弦楽のためのディヴェルティメント より 第1楽章、第3楽章

「ディヴェルティメント」は音楽ジャンルとしては会食の合間に提供される気軽な音楽、というぐらいの意味で使われて来た。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)の一群の作品がその代表と言われる。バルトークの場合はちょっと違う。1930年代後半のナチス・ドイツの興隆と、そのナチスによるオーストリア併合の時代、スイスを拠点として活動していた指揮者パウル・ザッハー(1906～99)のために、まず『弦楽器、打楽器、チェレスタのための音楽』を書き、1939年の夏にはこの『弦楽のためのディヴェルティメント』を書き上げた。

全3楽章で、第1楽章はソナタ形式、第3楽章はロンド・ソナタ形式を採るが、あえて、古典的な形式感を持った作品を書いたことに、音楽史の流れの中にあらためて自分を位置づけてみるというバルトークの意欲を感じる。

ブルッフ(ベン=アリ 編曲)：『コル・ニドライ』作品47

ケルン生まれの作曲家マックス・ブルッフ(1838～1920)は、ヨハネス・ブラームス(1833～97)の5歳年下で後期ロマン派に分類される作曲家ではあるが、82歳と長命で、亡くなったのも第一次世界大戦後なので、より20世紀に近い作曲家という印象がある。有名なヴァイオリン協奏曲第1番、スコットランド幻想曲など、ヴァイオリンをフィーチャーした作品が有名だが、『コル・ニドライ』はチェロと管弦楽のために書かれた作品で、1881年に初演された。ユダヤ教の典礼歌からふたつのメロディーを借りている。

今回はそのブルッフの作品をオハッド・ベン=アリ(1974～)が編曲した版でお聴き頂く。静かな弦楽器による導入部の後、独奏チェロがタイトルともなった『コル・ニドライ』(ユダヤ教の祭日ヨム・キプルで歌われる哀調に満ちた典礼歌)を奏でる。その後、弦楽合奏とチェロがその歌を発展させていく。ハーブによるハーモニーが静かに聞こえ始めると、第2の歌である「ああ、彼らのために泣け」が奏でられる。情感豊かなメロディーはいったん高まった後、静かに消えていく。